ウルク文化の「受け皿」としての北メソポタミア

小口裕通
Hiromichi OGUCHI

Northern Mesopotamia as a Receptor of the Uruk Expansion

プレ・コンタクト期を中心とする問題と提言

従来、ウルク期の特徴的な土器であるいわゆるベヴェルド・リム・ボウル（bevelled rim bowl）が南メソポタミアの周辺地域でも出現することはよく知られていたが、近年の発掘調査はその土器のみならず、ウルク文化がウルク中期に南メソポタミアから周辺地域へと拡散を開始した事実を明らかにするに至っている。ここで対象とする北メソポタミアもウルク文化が波及した地域である。ティグリスやユーフラテス河沿いのルートの他、イラクのシンジャル、テル・アファル平原を縦断しシリアのハブール盆地に至るルートがウルク文化の北進に役立ったことは疑いなく、そのルート上のハブール盆地の入口にはウルク中・後期に関係する層をもつテル・ブラクが存在する。北メソポタミアで当該時期にかかわるこの代表的な遺跡を含めて、G. アルガゼ（Algaze 1993）やG.J. スタイン（Stein 1999）らのようなウルク後期についての理論の展開（鉱物資源獲得のための、南メソポタミアの人々の前哨基地や植民都市の存在）や、J. オーツ（Oates 1993）のような解釈の提示（南のエリートたちが自分らの権威を誇示するための鉱物資源獲得行動）となるわけだが、現状では、それ以上に論理を発展させたり充分な検証を行ったりする余地は以外と少ないと言わざるを得ない。むしろわれわれは、国外の研究者がそうであるように、「北方ウルク前期」あるいは「北方ウルク前期〜中期前半」（テペ・ガウラの第XI〜IX層を南のウルク前期に併行させるか南のウルク前期〜中期前半に併行させるかで異なるが、以下混乱をさけるため、特別な説明を付す必要がないかぎりにおいては、たとえばRothman 2001a: Table 1. 1, 2001b: 370-382; Schwartz 2001: 237-239に見えるような前者の考え方を採用）という時期に目を向ける時点に今立っているといえる。それはウルク文化の波及の「受け皿」側の状況の解明へと向かうことでもあり、その点からの追求がまた、ウルク中・後期に関して新たな理論の展開へと導く可能性を秘めているといえるのではなかろうか。したがって、ここでは現在明らかになりつつある、ウルク文化導入に先行するいわゆる『ガウラ文化』（北方ウルク前期／銅石併用時代後期第2期（LC2））について、まずはじめに若干のコメントを付したい。

まず注意を喚起することは、上記でもふれたが、もともと問題があるテペ・ガウラの層序の編年に関する考え方自体が変わってきていることだ。ガウラXI〜IX層が南のウルク前期（あるいはウルク前期〜中期前半）に対応する時期であることがわかってきているためである。たとえば、テル・ブラクでは南のウルク文化がかなり強く入り込んだ「ウルク中期」の層（この遺跡ではベヴェルド・リム・ボウルなどの南の土器タイプがわずかではあるが現れ始める層を、北の土器が主体を成すという意味において「北方ウルク中期（LC3）」とし、南のものが多くなる層を「ウルク中期（LC4）」として分けているので注意）よりもより古い時期と判断される、ガウラXI〜IX層相当の遺物包含埋土層やそのころの建築層（この遺跡でいう「北方ウルク前期（LC2）」）の存在が確認されている（Oates and Oates 1993: 183-184, 1994: Table 1, 1997: 7, Fig. 1）。つまり、ガウラXI〜IX層は、南のウルク期との対応を考えるE. ポラダの編年でいえば、『ガウラ中期』ではなく、『ガウラ前期』か、あるいは、ウルク中期の中ころにウルク文化の北進が盛んになったという仮定において『ガウラ前期〜中期前半』のなかにに位置づけられそうなのである[1]。

次に注目すべきは、北メソポタミアにも南メソポタミアと時期を同じくして、型に入れて作られたと考えられる大量生産型の土器があったという事実である（図1）。器壁外面が凹凸状を呈し器壁内面底部に指の圧痕を残す、型押し作りのベヴェルド・リム・ボウル（ウルク、エアンナ地区第XII層から、すなわちウルク前期に出現し始める[2]）は南メソポタミアの大量生産型土器の一形態であることは言うま

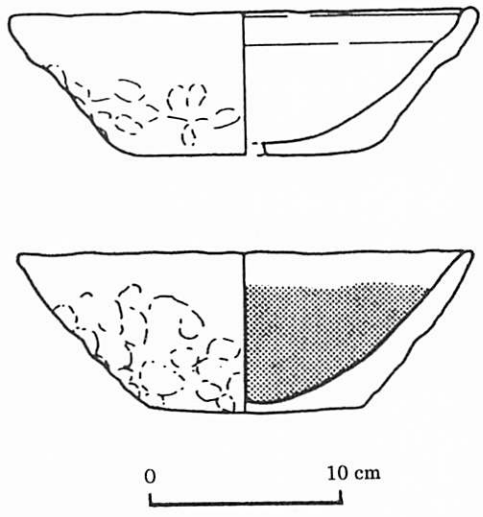

図1　北メソポタミアの大量生産型土器
（テル・ムシャリファ出土）

でもあるまい。北メソポミアではいわゆる「ジョバ・ボウル (Coba bowl)」と呼ばれるものがそれに該当する。それは、トルコ、サクジェ・ギョズ村の近くの遺丘ジョバ・フユク (Coba Hüyük) の第ⅣA～C期の層出土の鉢に与えられた名称で、そこではこの種の鉢はウバイド期末ころに出現したと考えらているが、ガウラやブラクで「ワイド・フラワー・ポット (wide flower pot)」と呼ばれる、その少し後の時期の鉢と同類とみなされるものでもある[3]。前者を「西方ジョバ・ボウル」、後者を「東方ジョバ・ボウル」と呼ぶ研究者もいる。このような名称の妥当性の是非は別にして、この鉢類は実際にはいくつかのタイプに分けられることも事実 (Rothman 2001b : n. 11) で、また同じタイプであったとしても、器壁外面の調整に差異がある場合がある。たとえば国士舘大学調査隊が発掘した北イラクの、ここでいう南のウルク前期に対応するという意味での『ガウラ前期』(北方ウルク前期(LC2)) の後半に位置づけられる単一時期遺跡テル・ムシャリファ (Tell Musharifa) では、「ワイド・フラワー・ポット／東方ジョバ・ボウル」は(1)器壁外面が凹凸状のもの、(2)凹凸状の器壁外面上におそらく回転台上で調整を加えたもの、(3)加えられた調整により器壁外面から凹凸が消えたもの、3種に分類できる。いずれも器壁内面はスムーズであり球面状を示すが、ただ多くのものは器壁外面がベヴェルド・リム・ボウルに酷似する外観を示すため、型入れによる製作ではないかと考えられるのである[4]。興味深いことは、図2に示したように、この種の土器が北イラクからシリアのハブール盆地やバリーフ川中流域を経てトルコ、ガジアンテプの西北西の地域やケバン・ダム水没地域にまで及ぶ広範囲な分布を示すことだ (Akkermans 1998a : 312-314, 1998b : 119-120)。それは、今まで『ガウラ文化』といわれてきたものの広がりを暗示する。たとえば、ケバン・ダム水没地域の遺跡ノルシュンテペ (Norşuntepe) では、圧痕文や舌状垂下彩文をもつ土器が出土しているが、それらは正に北イラクのテペ・ガウラ出土の土器に酷似するのである[5]。

くわえるに、当該時期はガウラで「ハット・シンボル(hut symbol)」あるいはブラクで「スペクタクル・アイドル (spectacle idol)」(「覗き穴眼の偶像」とでもいうべきか) と呼ばれるもの[6]の盛行をみる時期でもあるが、問題なのは、これも広範囲な分布を示すものの一つであるということだ。主流は土製だが時として石製のものもあり、その形状もまず二つか三つに大別でき、たとえばガウラ出土の「ハット・シンボル」とされるものなかには明らかに同種のものとして取り扱うことができないものもある。それはさておき、「ハット・シンボル／スペクタクル・アイドル」と呼ばれるものの機能については、「偶像」として取り扱うことができるか否かという点で、かなり問題視されている (小泉2001：114-118)。D. オーツ夫妻はブラクからの出土に際して、それらを織物をつくる地機の支えとして用いられたものとするが (Oates and Oates 1993 : 137)、提唱者自身が自覚するように、その見解はまだ憶測の域を出るものではない (1998年におけるJ. オーツさんからの個人的情報)。日用品としての用途をもつものならば、本当に何に使われたのか、あるいは、もしも宗教的なものであるならば、ブラクにおける後の、すなわちウルク後期(LC5)のいわゆる「眼の神殿」から出土するような「眼の神像 (eye idol)」(現在、同じハブール盆地の遺跡テル・ハモーカル (Tell Hamoukar) ではウルク後期 (LC5) 以前の層からの出土をみる) との関係はどうなるのか、あるいは、日用品としての用途をもつものと宗教的なものとに分割できるのかなど、それが用いられた時期のことも含め、かなり研究の余地を残す遺物である。ただ、宗教的なものであるならば、ガウラやブラクをはじめとして、トルコ、ビレジク・ダム水没地域の遺跡ハジュネビ・テペやマラトヤ近傍の遺跡アルスランテペなどでの出土 (くわえるに、ウルク中期における南の文化の北進の証拠をいち早く提供するに至った、タブカ・ダム水没地域の遺跡シェイフ・ハッサンの発掘ではウルク中期後半 (LC4) の層でも出土) は、分布という点で興味深い映像を浮かび上がらせるはずだ。

以上、とくに二つの点について言及したが、この時点でいえることは、いわゆる『ガウラ文化』と呼ばれるものが北イラクやその近隣に止まらず、地域差はあるにしても、かなり広範囲な広がりを示すかもしれないということである。そうであれば、当然『ガウラ文化』という用語は不適切となる。いずれにせよ、「北方ウルク前期(LC2)」という時期に、以上で言及した遺跡あるいは図2で示した遺跡が存在する地域間に、何かしらの相互関係かあるいは密なるコミニュケーションがあったことが想定されよう。ウルク中期にそのような地域に、点あるいは線状に南の拠点が設けられ、そこから放射状に南のウルク文化が周辺に浸透し始める。「ジョバ・ボウル」も結局、南のベヴェルド・リム・ボウルに置き換わることになる(図3)。北メソポタミアではウルク後期 (LC5) にはベヴェルド・リム・ボウルは使用において村落にまで普及する。ウルク文化の浸透時、その「受け皿」側ではどのようにその文化を受け入れたのか、あるいは受け入れるとき何が起こったのか、あるいはその時もそれらの地域間のコミュニケーションは維持され続けたのか、視点を変えた場合大きく疑問は膨らんでいく。さらにくわえるに、ウルク後期終末には、北イラクではテル・モハンマド・アラブ (Tell Mohammed Arab) のような一末端遺跡で、それよりも古い北方の他のウルク後期の遺跡とは異なり、彩文土器を伴ったかたちでベヴェルド・リム・ボウルやウルク的刻文土器が出現する[7]。北方でのウルク

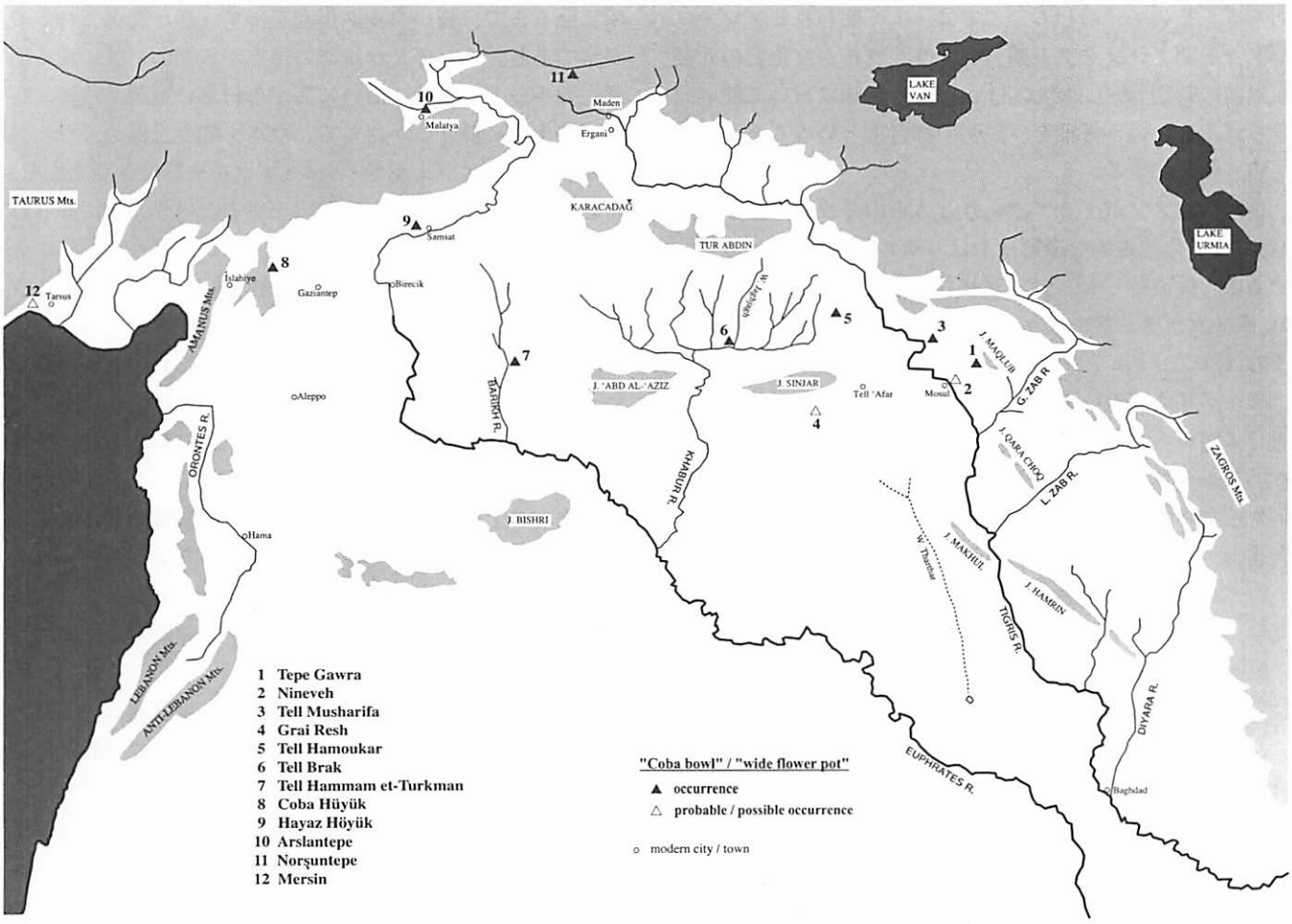

図2　「ジョバ・ボウル」/「ワイド・フラワー・ポット」出土遺跡

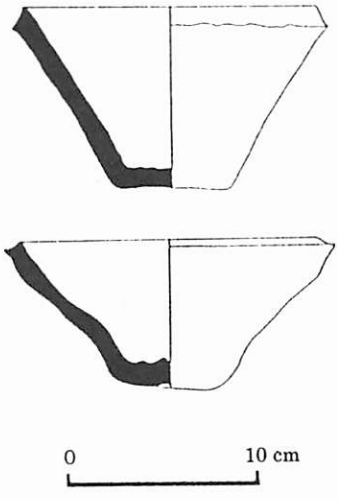

図3　ベヴェルド・リム・ボウル（テル・ブラク出土）
(Oates 1985 : Fig. 3 : 40, 42)

文化崩壊の前ぶれを示す一現象として捉えることができるのだろうか。ウルク中・後期に起こったウルク文化の北進すなわち北メソポタミアへの「ウルク・エクスパンション」についての解釈は、このように前後の時期を考えることによって、また「受け皿」側から物事を眺めることで、さらに一歩進むように思われてならない。

コンタクト期一瞥

最後にいわゆる「ウルク・ワールド・システム」という観点から、北メソポタミアについて若干のコメントを付そう。そこで従来問題とされていた時期は、言うまでもなく、北メソポタミアでも「ウルク後期」と呼ばれる時期[8]、あるいは「銅石併用時代後期第5期（LC5）」と呼ばれる時期で、ウルク文化を担う南メソポタミアの人々（シュメール人か？）の拠点が広範囲に数多く点在した時期である。しかし、いわゆる「ウルク・エクスパンション」は、ウルク中期に起こったと現在考えられているわけで、たとえば、前述したテル・ブラクからの証拠は、ウルク中期の前半（LC3）にすでに南メソポタミアとの接触が始まっていたことを示唆し、そしてウルク中期の後半（LC4）には南の人々の拠点がそこに存在したという強い可能性を示しているため、「ウルク・エクスパンション」はウルク中期の中ころから盛んになったと現時点では考えることができるのであって、そのことはここでまず念頭に置いておかねばならないことで

あろう。そして、むしろここでは、よく使われるプレ・コンタクト期とコンタクト期（つまり、ウルク文化との「接触以前の時期」か、「接触期」かという意味において使い分けられる）という言葉を、説明の都合上ということもあって使うことにする。

また、北メソポタミアでいうところの「ウルク後期」といえば、その代表的な遺跡はやはりテル・ブラクとニネヴェである。両遺跡とも、アルガゼらが指摘するところの当時の、南メソポタミアの人々の拠点があったとされる場所で、一方はシンジャル、テル・アファル平原縦断ルート、他方はティグリス河沿いのルートという主要ルート（幹線）を通じて南から北の天水農耕地帯に入るための拠点に位置する。テル・ブラクからはウルク後期に年代づけられる、数字や絵文字の粘土板も出土していて、文字という観点から南北両メソポタミアの接触を示唆するものとして、さらに一層アルガゼらの理論を裏付ける証拠となりそうである。ウルク中期の後半(LC4)にはユーフラテス河上流域の手前に位置するシェイフ・ハッサンにもすでに南の拠点が存在していたのであるが、その場所がブラクやニネヴェとともに、トルコのエルガニやマデンという銅資源を保有する地域に容易にアクセスできる地理的位置にあることも事実である。それは、鉱物資源の獲得を目的としたという理屈に結びつく。

何の目的でそのような拠点が設けられたかということはここでは別問題として、では、南の拠点が設けられるに至ったなかでの、ここでいう「受け皿」側の状況はどのようになっていったのだろうか。いまだに詳細なデータが揃わない現時点においても、T.J. ウイルキンソンとD.J. タカーが北イラクの遺跡テル・アル・ハウワ（Tell al-Hawa）周辺で行った、遺物の表面分布調査を基盤とした遺跡の時空的な分布分析を含む地理形態学的な調査の結果に、われわれは興味深い事実を垣間見ることができる（Wilkinson and Tucker 1995）。その調査結果からは、プレ・コンタクト期には、その地域では居住地として規模が大きなものはテル・アル・ハウワだけで、他は多数の小村落が散在するかたちをとっていたが、コンタクト期に入ると小村落は急激に減少し、推定可能な当時のルート沿いで発展した、少数の中程度の大きさの村落に併合されたかたちをとるようになったことがわかる（Wilkinson and Tucker 1995 : 43-45, Fig. 35）。ルート沿いに村落が集中するようになったということは、ウルクの交易（？）ネットワークがかなり細部にわたり確立されていたことを示しているのであろうか。ウルクの拠点とみなされるものは幹線となる主要ルート上の要衝に位置することは確かで、そのような遺跡では土器のみならず、「管理」や「記録」を目的とした封印付き中空粘土球やトークン、あるいは粘土板、封泥、また建物の要素に至るまで、強いウルク指向を示す証拠が提供されるのが常である。そして、ウルクの拠点から網の目状に走る細部主要ルート（支線）沿いに広がる村落の遺跡からは、在地系の土器に混ざるかたちで、ウルク的な土器や、ウルク土器すなわちベヴェルド・リム・ボウルや耳付き刻文土器、時として垂下注口土器などが出土するということになるわけだが、はたしてその細部主要ルートから外れて、ウルク文化の影響を受けなかったような村落は存在したのだろうか。ウルク文化の影響を受けたもの、受けないものの有無の問題を含め、それらを分布図上で一見したいという焦燥にかられるのだが、まだそこまでのデータが揃う段階にまで至っていないのが実状である。いずれにしても北メソポタミアではたしかに小さな遺跡からも、たとえ量が少なくてもウルク土器が出土し、ウルク文化の影響の強さを感じさせる。今後、新たな発掘や調査からの充実したデータが揃ったとき、いわゆる「ウルク・ワールド・システム」論を発展あるいは修正したかたちでの新しい統合論（synthesis）が生まれるはずだ。

上記の問題に関連して、ここでハブール盆地のなかにある遺跡シャガル・バザール（Chagar Bazar）での最新の発掘調査で生じた問題を引き合いに出そう。イギリスのM.E.L. マロワンによる1930年代の発掘から数十年を経て、1999年にイギリス、ベルギー、シリアの合同調査隊によって再開されたこのシャガル・バザールでの発掘調査では、マロワンの調査時には見逃されていた前4千年紀の層の存在が明らかにされている（McMahon et al. 2001 : 204-205）。問題なのは、コンタクト期にこの場所がウルク文化の影響を受けなかった村落であった可能性が、そこで模索されているということだ（McMahon et al. 2001 : n. 12）。多くの表採品はテル・ブラク出土のコンタクト期の在地系土器に類似するものであるという。しかし、頻出度の高いベヴェルド・リム・ボウルはもちろんのこと、南のウルク土器といえるものが表採品としても、また発掘からの出土資料のなかにおいても、皆無であるという事実にぶつかったのである。深堀りを行った試掘坑ではプレ・コンタクト期の層が確認されたが、それは表採品からの推定とは合致するものではなかった。ただ単にその試掘では確実にコンタクト期といえる層にあたらなかっただけかもしれないが、あるいは在地系の土器に関しては時期的指標になるものは別にして、プレ・コンタクト期のものとコンタクト期のものとが確実に識別できる研究段階にまでまだ到達していないということもあるかもしれないし、あるものについては識別が不可能な場合もあり得るだろう。したがって、当然そこには結論を出す以前の問題があることは疑いない。ただ、今後この遺跡での調査が、コンタクト期においてウルク文化の影響を受けない場所もあったということを証明するよ

うな場合には、「ウルク・ワールド・システム」論に関して新たな一頁が加えられることになるにちがいない。

アルガゼの理論では、コンタクト期のなかでの一つの先行段階として、ユーフラテス河ではなく、ティグリス河沿いのルートでのウルク文化の導入、すなわちティグリス河を北上しハブール盆地に至り西方向に向かいシェイフ・ハッサンのあるユーフラテス河流域に到達するという想定がなされるわけであるが（Algaze 1993：110-111, Fig. 46-b)、その想定が正しいとすれば、プレ・コンタクト期に密接な関係にあったと考えられる一帯を横断するかたちで、ウルク文化の導入が行われたことになる。ウルク文化導入時、言い換えれば、ウルクの拠点が設けられようとする過程で、南北両文化の「対立」といえるべきものは起こらなかったのであろうか。「対立」ということは通常想定され得ることであるが、むしろ容易に受け入れたのではないかという気がしてならない。そうだとすれば、プレ・コンタクト期に存在したと仮定される東西の密なるコミュニケーションがウルク文化導入過程で利用された可能性が出てくる。しかし、「受け皿」側にとっての利は何であったのだろうか。それはまだ解き明かされていない問題でもあるだろう。

註

1）ここでの記載内容については、Porada et al. 1992：Vol.II：96の編年表を見て比較せよ。

2）Porada et al. 1992：Vol. I：97 に拠る。くわえるに、ウルク、エアンナ地区の発掘記録にもとづきその出土土器を再考察したD. シュレンハーゲンは、第IX層の段階（E. ポラダの編年ではウルク前期末）でベヴェルド・リム・ボウルが優位を占めることは明らかで、遅くともその段階ですでに大量生産されていたことは疑いないと指摘している（Sürenhagen 1986：8)。

3）テル・ブラクの発掘で土器資料の考察を担当するJ. オーツは「ジョバ・ボウル／ワイド・フラワー・ポット」を大量生産型の土器とみなしているが（Oates and Oates 1993：181)、それが本当に大量生産型の土器の範疇に入るかどうかについてはおそらく他の研究者のあいだでは異論があるところであろう。とはいえ、出土量ということをその考慮点とするならば、大量生産された可能性は充分にあるといえる。たとえば、ジョバ・フユクやテル・ブラクでは多量に出土することは確かな事実であり（du Plat Taylor et al. 1950：100；J. Oates 1985：177)、また、この本文で引き合いに出されるテル・ムシャリファでも、それは多く出土し、最も出土率が高い土器なのである。

4）たとえば、P.M.M.G.アッカーマンは、「ジョバ・ボウル」がことによると型入れづくりのものであるかもしれないとしてその可能性を示唆し、他方、J. オーツは「ワイド・フラワー・ポット」について、口縁部は回転台上で仕上げられているが、ある程度は型入れで作られているように思われるとしている（Akkermans 1988a：312, 1988b：119；Oates and Oates 1993：181)。テル・ムシャリファでも、この類の鉢は器壁外面が凹凸のものであっても、口縁部の器壁外面だけには指による調整痕が平行細線状に見られるのが普通であり、そしてすべてのものにおいて内面にはっきりした調整痕が看取できず、内側がとにかくスムーズで球面状を呈することは事実だ。それはテル・ブラクの土器資料に基づくJ. オーツの観察と一致するようであり、またその土器を一見したとき、ベヴェルド・リム・ボウルとは口縁の形が異なるということもあってそれとはやり方を異にするかもしれないが、基本的には型入れづくりで後に調整を加えたものではないかという気持ちにさせられることも事実である。だが、この点においては、おそらく異議を唱える研究者がいるであろう。シリアのテル・カシュカショク（Tell Kashkashok）やテル・コサック・シャマリ（Tell Kosak Shamali）で一貫して、「ジョバ・ボウル」を含む数多くの土器の観察をしてきた小泉龍人さんは、土器製作においては器壁内面に製作技法上の差がでやすいという点を考慮かつ重視して、「ジョバ・ボウル」の内面の様子は明らかに回転台上で成形されたことを示すものであると指摘する（小泉さんからの教示による)。実に重要な意見である。「ジョバ・ボウル／ワイド・フラワー・ポット」の製作技法については、国外の研究者のあいだでも明確に即答できる人はいないであろうし、「北方ウルク前期」について今後議論が展開される上でも一つの論点となるはずだから、小泉さんのような見解は、「北方ウルク前期」に目が向けられつつある今こそ国内のみならず国外でも提示が望まれる。

5）ノルシュンテペの関連土器については Gülçur 2000：Abb. 48 を見よ。それを Tobler 1950 掲載土器図と比較せよ。

6）また、「ハット・シンボル／スペクタクル・アイドル」そのものは、小泉2001：115図45を参照せよ。

7）ウルク後期にかかわるこの遺跡の問題については Roaf 1998：131-132 を見よ。

8）じつは、前4千年紀の北メソポタミアの時期細分の名称については研究者間でいまだにコンセンサスがとれていないのが現状である。そして、その用語の問題は、この稿でも読み手にとって混乱をきたす一因となっていることであろう。この稿では説明上煩雑になることや頁数の増加を避けるために用語の使用において一貫していない部分も多々あるが、筆者の脳裏には常にJ. オーツが用いる用語法、すなわち北の要素が支配的あるいは強い時期に「北方ウルク」という言葉を使い南の要素が強い時期を単に「ウルク」という言葉で表す方法（「北方ウルク前期」、「北方ウルク中期」、「ウルク中期」そして「ウルク後期」）に準じようとする意識が働いていることをここに付言しておく。それらは、「銅石併用時代後期（LC）」という言葉で言い換えれば、第2期（LC2)、第3期（LC3)、第4期（LC4)、第5期（LC5）となる。なお「北方…云々」といわれるときは、執筆者によって含意するところが異なる場合があるので注意を要する。

参照文献

Akkermans, P.M.M.G. 1988a Chapter 8：The Period V Pottery. In M. N. van Loon (ed.), *Hammam et-Turkman I. Report on the University of Amsterdam's 1981-84 Excavations in Syria* I. Uitgaven van het Nederlands Historisch-Archeologisch Instituut te Istanbul 63, 287-349. Istanbul, Nederlands Historisch-Archeologisch Instituut te Istanbul.

Akkermans, P.M.M.G. 1988b An Updated Chronology for the Northern Ubaid and Late Chalcolithic Periods in Syria：New Evidence from Tell Hammam et-Turkman. *Iraq* 50：109-145.

Algaze, G. 1993 *The Uruk World System：The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization*. Chicago and London, University of Chicago Press.

Gülçur, S. 2000 Norşuntepe: die chalkolithische Keramik (Elazığ Ostanatolien). In C. Marro and H. Hauptmann (eds.), *Chronologies de pays du Caucase et de l'Euphrate aux IVe-IIIe millénaires*. Acts du colloque d'Istanbul, 16-19 décembre 1998. Varia Anatolica XI, 375-418. Paris, Institut Français d'Etudes Anatoliennes d'Istanbul, De Boccard Edition-Diffusion.

McMahon, A., Ö. Tunca and A.-M. Bagdo 2001 New Excavations at Chagar Bazar, 1999-2000. *Iraq* 63: 201-222.

Oates, D. and J. Oates 1993 Excavations at Tell Brak 1992-93. *Iraq* 55: 155-199.

Oates, D. and J. Oates 1994 Tell Brak: A Stratigraphic Summary, 1976-1993. *Iraq* 56: 167-176.

Oates, D. and J. Oates 1997 An Open Gate: Cities of the Fourth Millennium BC (Tell Brak 1997). *Cambridge Archaeological Journal* 7/2: 287-297.

Oates, J. 1985 Tell Brak: Uruk Pottery from the 1984 Season. *Iraq* 47: 175-186.

Oates, J. 1993 Trade and Power in the Fifth and Fourth Millennia BC: New Evidence from Northern Mesopotamia. *World Archaeology* 24/3: 403-422.

du Plat Taylor, J., M.V. Seton Williams and J. Waechter 1950 The Excavations at Sakce Gōzū. *Iraq* 12: 53-138.

Porada, E., D.P. Hansen, S. Dunham and S.H. Babcock 1992 The Chronology of Mesopotamia, ca.7000-1600 B.C. In R.W.Ehrich (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology*, 3rd ed., Vol.I, 77-121; Vol.II,90-124. Chicago and London, University of Chicago Press.

Roaf, M. 1998 A Group of Pottery from Mohammed Arab Period 1. In M. Lebeau (ed.), *About Subartu. Studies Devoted to Upper Mesopotamia*, Vol.1: Landscape, Archaeology, Settlement. Subartu IV,1, 131-149. Turnhout, Brepols Publishers.

Rothman, M.S. 2001a The Local and the Regional: An Introduction. In Rothman (ed.) 2001, 3-26.

Rothman, M.S. 2001b The Tigris Piedmont, Eastern Jazira, and Highland Western Iran in Fourth Millennium B.C. In Rothman (ed.) 2001, 349-401.

Rothman, M.S. (ed.) 2001 *Uruk Mesopotamia & Its Neighbors: Cross-Cultural Interactions in the Era of State Formation*. Santa Fe, New Mexico, School of American Research Press; Oxford, James Currey Ltd.

Schwartz, G.M. 2001 Syria and the Uruk Expansion. In Rothman (ed.) 2001, 233-264.

Stein, G.J. 1999 *Rethinking World-Systems: Diasporas, Colonies, and Interaction in Uruk Mesopotamia*. Tucson, Arizona, University of Arizona Press.

Sürenhagen, D. 1986 The Dry Farming Belt: The Uruk Period and Subsequent Developments. In H. Weiss (ed.), *The Origins of Cities in Dry-Farming Syria and Mesopotamia in the Third Millennium B.C.*, 7-43. Guilford, Connecticut, Four Quarters Publishing Co.

Tobler, A.J. 1950 *Excavations at Tepe Gawra*, Vol.II. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.

Wilkinson, T.J. and D.J. Tucker 1995 *Settlement Development in the North Jazira, Iraq: A Study of the Archaeological Landscape*. Iraq Archaeological Reports 3. Warminster, Aris & Phillips Ltd.

小泉龍人　2001　『都市誕生の考古学』世界の考古学17　同成社。

国士舘大学イラク古代文化研究所
The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq,
Kokushikan University